書評

家永三郎著

太平洋戦争

中塚　明

一

太平洋戦争は、日本人にとって史上もっとも苛烈な歴史的体験であった。この日本史上の大事件をどう考え、どのように理解するかということは、今日われわれがどう生きていくか、ということに深くかかわる大問題である。なぜならば、今日、日本においてふたたびアジア諸国への膨脹を試みようとする勢力が、論壇や国民教育、その他あらゆる思想・文化の分野において、「大東亜戦争肯定論」をはじめとするさまざまの議論をくりひろげ、戦争を美化したり、運命的宿命的なものとしたり、その他、戦争の歴史的な本質を見失わせようとするさまざまの試みをつづけているからである。日本政府の手で企画され、遂行されている「明治百年」記念事業なるものは、その試みを集大成しようとするものである。――こういうときに、戦争を直接体験しようが、しまいが、この太平洋戦争から何を学びとるかは、われわれ個人にとっても、日本民族にとっても、その将来にかかわる大問題であるといわねばならない。

周知のように家永三郎氏は、文化史・思想史にすぐれた業績を発表しておられる学者である。そして「戦争のような政治史・国際関係史的テーマは私の能力を超えた課題」であるとは氏自身がのべているところである（あとがき、三四三頁）。にもかかわらず、単独で『太平洋戦争』という著述を今日発表されたのは、「戦争の惨禍を身にしみて体験してきた歴史家の一人として、この戦争に改めて科学的な光をあてて見直してみたいという執念」からであったと、本書執筆の動機を告白しておられる（あとがき、三四三頁）。そして「再びこのような『戦争の惨禍』のくり返されないことを心から願っている日本市民の一人として、アカデミックなメリットの有無などということよりも、どうしたらば戦争のいちばんかんじんの問題点にふれることができるかに常に心を配りながら熱情をこめて執筆に当った」（序、Ⅳ～Ⅶ頁）のである。

わたくしはまずはじめに、家永氏があえて自分の専門領域にこだわることなく、まさに今日の国民的課題ともいうべき、太平洋戦争の歴史的解明に大胆に立ちむかわれたことにたいして、深甚の敬意を表するものである。

ところで、著者は太平洋戦争を論ずるに当って、著者の必ずしも専門としない「戦争の経済的基盤の考察とか、支配者層内部の動き、外交接衝、戦闘の経過等についての細部にわたる追跡とか、外国の側での戦争への対処の仕方の精考とかは、はじめから断念し」、著者の「能力と専門と視野の許す範囲に問題を限定」しているが、同時に著者の「特殊な関心を積極的に活用することにより、この戦争の歴史的本質をつくために全力を注ぐ」とはじめにことわっている（序、Ⅴ頁）。

著者が専門的能力の及ばないとして、はじめからその追究を断

念したという諸問題を究明せずして、はたして太平洋戦争を科学的に理解できるか――という疑問や批判は、当然本書の読者からでてくるであろう。しかし著者が追究を断念した諸問題を欠いては、この戦争のトータルな叙述となり得ないことは、著者も熟知しているところであり、それを承知のうえでなおかつ著者は「この戦争のいちばん大切な点の理解には欠けることのないよう配慮して」本書を叙述したのである（序、V頁）。（もちろん、著者の叙述の限定が、ただ「叙述の限定」ということにとどまらず、太平洋戦争の理解を本質的に左右するような問題に影響を及ぼしているのではないか、と考えられるところがないでもない。――この点は重大な問題なので、後述して問題を提起し、著者のご教示を得たいと思う）。そして、叙述を限定しながらも、可能なかぎりわれわれ日本人に、太平洋戦争がどういう戦争であったかを考えさせ、理解させようとする著者の意図は、その叙述の範囲において、見事に実を結んでおり、本書は直接戦争を体験したものにも、そうでない若い世代の読者にも、深い感銘を与えずにはおかない著述となっている。

二

さて、本書のすぐれた点はたくさん数えることができるが、いまその特徴的な諸点をあげてみよう。

まず第一は、著者は「太平洋戦争」を「柳条溝事件から降伏にいたるまでの、日本の諸外国との連続した一連不可分の戦争を指すのであり、厳密には『十五年戦争』と呼ぶべきものである」（序、Ⅲ頁）としている点である。もちろん、太平洋戦争を「満州事変」いらいの十五年戦争とみる見方は、著者がはじめて提起したものではない。かの歴史学研究会編の『太平洋戦争』（全五冊）をはじめ、井上清、藤原彰らの諸氏によって、この見解はたえず強調されてきた。しかし、今日「太平洋戦争」の名であらわれる書物の多くが、真珠湾攻撃から筆を起こし、また学校教育においても、「満州事変」、日中戦争、太平洋戦争はそれぞれ独立した戦争であるかのように教科書にもかかれ、教授もされている現状においては、太平洋戦争を十五年戦争としてみる見方は、いくら強調されても強調されすぎることはないのである。

太平洋戦争を十五年戦争とみる見方は、いうまでもなく中国との戦争を基軸とした連続戦争とみる見方であり、この連続戦争における中国共産党の指導する抗日勢力の決定的役割を重視する見地とわかちがたくむすびついている。著者は第一編で、日本国民が戦争を阻止できなかった要因の第一に、日本人の対中国認識、日本国家の中国政策の歪みをあげているが、それと対応して、第二編第四章において「中国侵略における誤算」をかき、その章末で、「中国侵略をもって十五年戦争の核心とみる吾人の見解によれば、この戦争の主戦場は、米英等と開戦した後といえど、依然として中国にあったと見るのを正当と考えるものであり、その場合主たる敵は国民政府軍ではなく共産軍であって、共産軍のねばり強い抗戦の故に日本軍は泥沼戦争に引ずりこまれ、勝目のない対米戦争まで始めざるをえぬはめに追いこまれて大破綻を招いたのであることを銘記すべきではなかろうか」（一二〇頁）と中国との戦争――とりわけ中国共産党の指導する抗日勢力との戦争が、日本の敗北に決定的意味をもった点を指摘し、「太平洋戦争を太平

洋上のドラマティックな活劇シーンだけで理解するのは、もっとも非科学的な見方」（一二一頁）であると、太平洋戦争＝日米戦争とみる見方をきびしくしりぞけている。

わたくしは、著者のこの主張に全面的に賛成である。著者のこの主張は第一編第一章と見事に対応しているだけではなく、今日でもなお抜きがたく存在する日本人の中国蔑視の思想を正し、アメリカのアジア侵略の尻馬にのって、ふたたび日本国民をアジア諸民族と敵対させようとする為政者の企図に大きな警告を発するものである。

つぎに第二点。それは本書が太平洋戦争にたいする日本人の証言ともいうべき、世上に流布している記録類を丹念に集め、それをもとに戦争の実態を具体的に叙述していることである。著者は「本書の場合、私の他の専門的著作のように新史料・新史実の紹介とか独創的見解の発表とかいうことに必ずしも重きをおかず、全体の構想はともかく、各部分の叙述に当っては世上に流布している史料や先行諸著作を利用させていただいたところが大部分を占めている」とことわっている（序、Ⅵ頁）。

歴史家が専門的著作をものするとき、さまざまの史料・事実の蒐集に苦労するのだが、しかしわたくしは、家永氏が本書において、世上に流布する史料を、かくも広範囲に集め、読破し、それを整理し、一定の体系的叙述の中に生かされたのを見て、その苦労は新史料・新史実の蒐集にまさるともおとらぬ大変なものであったろうと、その努力に深く敬服せずにはおれない。

まとまった大部の史料集の類はいうにおよばず、今日さまざまの週刊誌に登場する戦争に関する記事にいたるまで、およそ太平洋戦争に関する日本人の体験で記録されたものは、どのような片々たるものでも、ひとつも見逃すまいというばかりのすさまじい史料蒐集の態度は、著者の手がたい実証主義的手法とあいまって見事な成果をあげ、類書に見られない特徴となって、本書の価値をいちじるしく高めている。

考えてみれば、日本人のだれにとっても深刻な体験であった太平洋戦争について、日本人の多くがそれぞれの思想なり、立場から発言し、経験を記録するということは、他のどのような歴史上の事件よりも多いのは当然のことであって、その日本人の記録から戦争の本質をさぐりあてようとする方法は、きわめて正当な方法といわなければならない。ただあまりにも厖大な記録を個人の手で集め、整理することの困難にまずたじろいでしまうのであるが、著者はその困難にあえていどんで大きい成果をあげたのである。巻末の五十数頁にわたる注にかかげられた文献名は、さながら太平洋戦争研究のための文献目録の観をなしている。もちろん、これが文献のすべてではないことは著者も指摘するとおりであって、なおはかり知れぬ文献、未紹介の記録、何億という生証人が存在し、その蒐集・整理は今後の課題であることはいうまでもない。しかし、今後、太平洋戦争の研究をすすめようとするとき、本書にあげられたおびただしい注が、ひとつの有力なみちびきの糸になることはうたがいのないところであろう。

そして、著者はこの数多くの記録を取捨選択しながら、とくに戦争のもたらす惨禍を克明に述べ、また「大東亜共栄圏」の実態を暴露する点で、とくにきわだった成果をあげている。

戦争の惨禍という点ではただ戦争の非人間性をのべるだけでは

なく、アジアに君臨した日本軍隊の腐敗と暴虐が白日のもとにさらされ、その腐敗のゆえに起こった数々の悲劇が生々しく叙述されている。それだけではなくソ連軍・中国国民政府軍の日本人非戦闘員・捕虜にたいする不法行為、アメリカの原爆投下にもきびしい批判の目がそそがれている。このことは、およそ国際法に違反する行為にたいしては、敵味方を問わず、目をつぶらずに峻烈な告発をしてやまない日本人の手による太平洋戦争の戦争犯罪告発の書といってもよい本書の特色をよく示している。

また太平洋戦争において、日本軍が相手国の軍隊や人民にたいしてのみならず、日本国民自身にたいする加害者となった事実を具体的に例証し、「自存自衛」のためと称してたたかわれたこの戦争が、実は日本帝国軍隊による日本国民の保護どころか、抑圧、はては殺りくにまでおよんだことを告発し、太平洋戦争の本質を考えさせる具体的な事実を提起している。

「『大東亜共栄圏』の実態」の章では、朝鮮・台湾・関東州などの日本の植民地をはじめ「満州国」・中国本土・フィリッピン・マレー・ビルマ・インド・インドネシア・フランス領インドシナの各地における日本の支配の実態と日本軍のさまざまの不法・残虐行為がほとんど日本側の史料で明らかにされている。広汎なこの地域の日本の支配の実態と日本軍の行為、それにたいする諸民族の抗日闘争という問題は、それ自体独立して究明さるべき重要な課題であり、それを徹底的に明らかにするには厖大な紙数を要することはいうまでもない。そういう意味では家永氏の叙述は素描の域を出ないともいえるが、しかし「大東亜戦争」なるものが米・英帝国主義の圧迫から、アジアの諸民族を解放すると称し、また現在でもかかる主張が宣伝されているとき、家永氏の示した事実は、その欺瞞を暴露するうえに非常に大きな役割を果していることはだれしも認めるところであろう。読者は著者が示している具体的な事実を通じて「日本の力によってアジア諸民族が独立したのではなく、アジア諸民族は日本に抵抗することによって独立を達成したのである。日本にとって恥辱でこそあれ、それを日本の功績として誇るがごときは、およそ真実に反した逆立ちの評価とされねばならないであろう」（二〇八頁）というこの章の結論を納得して理解することができるであろう。

つぎに第三点。それは戦後の日本人民の覚醒、人民運動の高揚は、戦争中のうっせきした不満、戦争への怨嗟の声が敗戦によって爆発したものであり、戦後の諸改革がただ占領軍によっておしつけられたものではなく、「四分の三世紀以前に日本国民が希求した理想が、太平洋戦争というあまりにも高価な犠牲をはらったのちにようやく実現したもの」（二七五頁）であるということを明らかにしようとしたことである。そのため著者は第十二章で、戦時下の抵抗のさまざまの様態に行きとどいた理解を示し、ただ積極的な抵抗だけではなく、沈黙・非便乗の良心的活動などをも消極的抵抗として記述し、しかも第十三章では息のつまりそうな戦争中にも、戦後の諸改革の構想が国民の中に生まれつつあったことを、数少ない史料を紹介して叙述している。

もちろん、かかる抵抗なり、戦後構想なりが、組織的な力となって、自力で戦争勢力を打倒し、戦後の諸改革をたたかいとれなかった点は、本書の随所に指摘され、戦前の共産主義者の硬直した反戦闘争への批判（一四四頁）も行なわれ、そこにはなお解明を

要する問題で、本書では問題の提起に終っているところがあるわけであるが、「しかし、人間の行為の意味は、短期的な実効のみによって測定せらるべきではない。たといその時点において現実の成果をあげ得なかった場合でも、後人がその内から限りないはげましと豊かな教訓とを汲み出すに足る内容をもっているとするならば、それはやはり歴史的遺産として高く評価されて然るべきであろう。」（二五五頁）という著者の評価には、日本近代史を貫ぬく一方における専制と戦争の歴史にたいして、他方たえずそれとあいたいし、自由と平和を希求する日本人民の動向があったこと、そして高価な犠牲をはらっての太平洋戦争の敗北は、前者の道の破綻を示し、前者の道の決定的な否定のうえに後者の道がきりひらかれつつあることを明らかにしようとする著者の日本近代史への理解の基本的な立場がにじみでている。これは今日、日本の近代史を天皇制支配の原理ひと色にぬりつぶそうとする「明治百年」論にたいする根本的批判を、具体的事実を通して提起したものである。

三

以上のように、本書は大きい成果をあげたのであるが、著者がめざした太平洋戦争の歴史的本質をつくという点で、わたくしが本書に全く問題を感じないわけではない。それはどういう点かといえば、「軍」の歴史的な理解に関連してのことである。著者は第一編第三章で、「軍の反民主性・非合理性」についてのべ、「国民が戦争を阻止するための意識と行動の自由を奪われていた反面に、戦争の直接遂行者である軍には、ほとんど無制約にちかい意志決定と行動の自由があり、しかもその行動様式を規定する軍のあり方がいちじるしく非合理的・反民主的であったとすれば、軍の主導のもとに無謀な戦争がひき起され継続されたのは、必然の成行であったといえよう」（五一頁）とかいている。この指摘はもちろん正しい。

しかし、わたくしが問題と感じるのは、その軍が日本のいかなる階級の利益に奉仕し、またいかなる階級によって、その階級の利害をまっとうするものとして軍が支持されてきたのか、約言すれば軍の階級的性格如何――ということが、本書では必ずしも明確でないということである。もちろん、この問題の解明はそう容易なことではなく、紙数のかぎられた本書において、その解明が完全になされるとは思わないが、にもかかわらず私見によれば、この問題は太平洋戦争の歴史的本質の理解にかかわる問題であると思われるのである。

著者が軍の反民主性・非合理性を強調されるあまり――もちろんこのことはいくら強調してもしすぎることはないのだが――「政党内閣」や政党政治家、その他文官政治家の戦争への加担とその責任が、相対的に軽く扱われ、本書が全体として太平洋戦争＝十五年戦争の責任をもっぱら軍の責任とするような見解にみちびきかねない傾きをもっているのではないかと危惧するので、あえてこうした問題を提起するのである。

たとえば、「満州事変」の発端となった柳条溝事件直後の朝鮮駐屯軍の「満州」への無断越境出動を、若槻内閣が、いとも簡単に事後承認し、その経費支出を認めてしまったことについて「もしこのときに若槻内閣が陸軍との正面衝突を辞せない決死の覚悟

を以て関東軍・朝鮮軍の暴走を抑制する強硬措置を決行したならば、何程かの犠牲の出ることは免れなかったとしても、その後の事態の進行はよほど違っていたであろうと考えられないでもない」（八二頁）と若槻内閣の責任を問いながら、「統帥権のない政党内閣にその抑制を期待するのはむりな注文であったとすべきであろう」（八二頁）と書いている。このところなどは、はたしてただ内閣が統帥権をもっていないということからかかる事態になったのか、それとも政党内閣（それは日本の独占資本と不可分の政治勢力であることはこの段階ではだれも否定しないであろう）、政党に代表されている階級の階級的利害がそれに加わっているのか、いないのか、といった問題が、もっとつっこんで追及されるべきではないかと思う。そうでなければ戦争がもっぱら軍の独断専行によって、いたずらに拡大していったことが読者にクローズアップされ、この戦争が日本資本主義の危機とどう関係していたのかということが見失われてしまう結果におちいらないとも限らない。――この問題は、著者が専門的能力の及ばない分野のことで、叙述をはじめから断念した問題だとするには、あまりにも大きい問題ではなかろうかと考えるので、あえて私見を提示して著者のご教示を請う次第である。

四

以上、本書の成果と問題点を提示した。この内容の豊かな書物の書評としては、あまりにもとりあげた問題が部分的なものにとどまったかも知れない。あるいは著者の意図を充分くみとりえず書評の的のはずれた点があって、著者への礼を失したおそれなしとしないが、率直な読後の書評としたい。

ともあれ本書が太平洋戦争を否定する立場にたつ好著であることはいうまでもなく、ひとり学界のみならず、ひろく国民の方々に読まれることを期待するのはわたくしだけではないであろう。戦争否定の立場に立つことは、日本国憲法のもと、われわれ日本人にとってはあたりまえのことであり、家永氏はまさにその日本国憲法の精神を生かすべくこの著作をものされたのであろうが、いわばそのあたりまえのことが、ふみにじられていく事態が横行している現在の日本だけに、いっそう多くの人びとによって読まれることを期待せずにはおれないのである。

これをもって書評の筆をおく。最後にひとつ――本書の一七八、一八五、二二〇、二六六～七頁に、それぞれ「北鮮」、「内鮮」という文字が散見されるが、これはたとえば朝鮮北部、内地と朝鮮、というように増刷のときに改められた方がよいのではないかと思う。朝鮮人のことを朝鮮人といわずに「鮮人」などということが、朝鮮民族への侮蔑をあらわすいい方であり、「北鮮」、「内鮮」などの表記は著者の意図とはかかわりなしに、朝鮮への蔑視のひびきをとどめているとわたくしは考えるからである。

（B6判三七一頁　昭和四三年二月　岩波書店刊　定価五〇〇円）

（奈良女子大学助教授）